

王国の敗戦から
1年が経とうと
していた頃――
帝国の広場では、
とある式典が
執り行われる
こととなった。

調教の限りを尽くされ
蕩け切った乳首と
クリトリスで
手綱を引かれ
連れて来られたカレナ。

裸よりも恥ずかしい
女性の恥部が
丸出しになった衣服――
これが戦争で敗北した
被支配国民の女の《正装》
なのである。

連れてこられたのは、
帝国と王国の
和平条約締結記念式典会場。

そこで
待ち受けていたのは
敵国兵の中でも
二階屈強な大男だった。

着ているの服の差が、
カレナの羞恥心、
そして王国の男たちの
自尊心を蝕む。

その後ろには、
かつて戦場を共に
戦い抜いた部下たち。

式典への出席のため
小奇麗な服を纏わされていた。

これから行われる
式典の内容を
悟ったカレナだが、
待ち受けるその陵辱を
拒むことなど、
出来るはずが
なかった。

お立ち台に上げられた
カレナはまず、
集まった民衆に向かって
宣誓文を読まれた。

あう……え……え……
いかなる場合に
おいても
うぐうぐ



宣誓文は
和平とは名ばかりの
一方的な支配を
宣言する
内容だった。

それを騎士として
恥ずべき格好で
敵国民に対して
宣言させられる
カレナ。

股下にあてがわれた
男性器が、
期待で膨れ上がった
クリトリスに擦れ、
読み上げが詰まる度、
男根で早く読むよう
促される。

うおおおお
うおおおお
うおおおお

うううう
うううう
うううう

うううう
うううう
うううう

宣誓文を読み終わると
男に向けて自身の
生殖器を大きく広げ、
男性器が挿入しやすい
体制を取られた。

て…帝国男性様のおお
お…おち●ぽお…お
敗戦マシに
お恵み下さい

和平条約を受け入れた
王国と帝国との
友好の印として、
王国からカレナの
処女が捧げられるのだ。

帝国二を誇る巨根が、
カレナの処女膜を
押し広げながら
ゆっくりゆっくりと
挿入されていく。

塗りこまれた媚薬により
感度が上がった生殖器で
その感触を味わわされ、

押し寄せる快楽を
押し殺そうと
必死に耐える
カレナだったが――

うううう
うううう
うううう

うううう
うううう
うううう

うううう
うううう
うううう

和平の鐘

帝国に
忠誠を誓った国の
代表者に与えられる、
友好の証。

帝国によって卑しく
育て上げられた
3つの突起に、
それぞれひとつづつ、
それが取り付けられた。

性快楽と羞恥で
赤く腫れ上がる
突起物を卑しく
飾り立てる装飾品は、
少しの振動で
チリチリと鳴り、
淫猥な三点を
刺激し続ける。



大きなペニスを
突き立てられた
女性器と、クリトリス、
乳首をヒクつかせながらも、
これ以上
帝国の男共を
悦ばせまいと
耐えるカレナ。

チリ

しかし、身震いする度に
鐘が小さく鳴り、
耐えるカレナを
更に絶頂へと
追い立てる。

和平の鐘の
授与が終わると、
男はそのまま
カレナを抱き上げた。

自分の体を
軽々と持ち上げる
男の勇ましさに
不意を取られたのも
束の間――



男性器は
子宮を突き上げ、
膣壁を抉り、

カレナは
その無様な姿を
隠すことも
許されないまま、
壇上で派手に
絶頂した。

絶頂が
終わらぬうちに、
突き上げられる
男性器で絶頂――

そして徹底的に
調教されてきた
乳首とクリトリスを
鐘が刺激して
また絶頂

野太い声を
上げながら、
派手に
絶頂を続ける
カレナを――

敵兵はさらに、
露わになった
カレナのクリトリスに
鞭を入れる。

強烈な刺激に
意識を失いかける
カレナだが、
男が子宮を揺さぶり
それを赦さない。

絶頂――
女にとつての至福。
それを与えられる
属国の女は、
帝国男性に
謝辞を述べなければ
ならない。

あああああ!!!

ドク

んあ

ああああと...

平和の鐘と
屈強なペニスに
与えられる快楽に
大声で感謝を
述べながら、
潮を撒き散らす
カレナ。

カレナは意識を
失うまで、
無様な交尾姿を
晒され続けた。

ビビビビ
ビビビビ
ビビビビ

ふふふふふふ

んんん...

属国の女に、
当然避妊など
許されない。
男は容赦なく
カレナの膣内に
大量に射精した。

カレナにとって
生まれて初めて
受け入れる
精液。
それは、
騎士として、
王国民として、
そして女としての
敗北の証。

たつぷりと
中出しをされた
カレナの女性器が
広場の国民達に
よく見えるように
男はカレナの身体を
持ち上げる。

名前も知らない男の
子種を一杯に受け取り、
卑しく収縮を繰り返す
カレナの肉壁は、
侵略に成功した帝国側と、
侵略を受け入れるしか無かった
王国側の体制を
分かりやすく
物語っていた。

持ち上げられたまま
恥ずべき場所を
隠すこともできない
カレナは、

挿入された
男根の余韻と
胎内から溢れ出る
精液の温かみを
感じながら、
静かな絶頂を
繰り返した。

その後も、
広場での式典は
夜通し続いた
という。

殺到した男共に
男根を振じ込まれ、弄ばれ、
カレナは何度も何度も
絶頂を繰り返した。
玩具のように
いたぶられ、
お構いなしに
中出しを繰り返された。

最初は僅かな抵抗を
見せていたカレナも、
式典が終わる頃には
すっかり従順に
なっていた。
女として、
敗戦国の人間として――
支配されるものの立場を
その身を持って
解らされたカレナは、

浅ましく絶頂を
繰り返した拳句
男たちに
命令されるたびに、
下品に乳と尻を
自ら振り回して、
鐘を鳴らして
絶頂した。

敗戦国の女に、
誇りや品格は
必要無い。

ただただ
主人に従い、
卑しく媚び、
慰み者になり、
慈悲を請い、
男性器を
受け入れる。

誇り高き
騎士カレナは、
数々の調教を終え、
そんな属国の女の
代表に相応しい姿へと
作り変えられたのだった。